

第81回

休日の

# 午後のコンサート

休日の午後のコンサート

9.8(日) 14:00開演

東京オペラシティ コンサートホール

Sun. September 8, 2019, 14:00

at Tokyo Opera City Concert Hall

## 〈バッティストーニの感謝祭〉

With Gratitude From Andrea Battistoni

### 指揮とお話

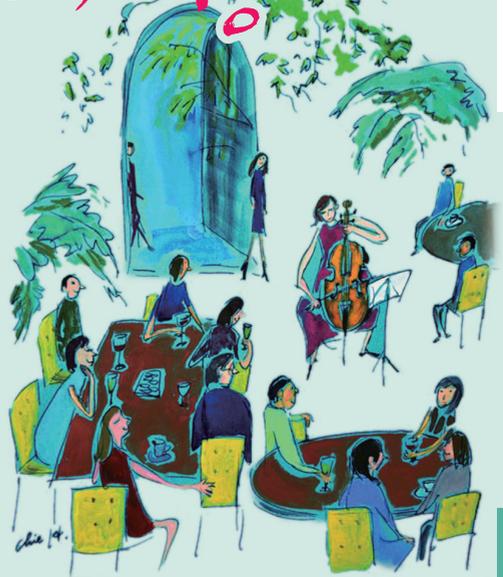
アンドレア・バッティストーニ

Andrea Battistoni, conductor & speaker

※指揮者のプロフィールはp5をご参照ください。

コンサートマスター 近藤 薫

Kaoru Kondo, concertmaster



9/8

フチーク：剣士の入场 Op. 68 (約3分)

Fučík: Entrance of the Gladiators, Op. 68 (ca. 3 min)

オフエンバック：ホフマンの舟歌(約3分)

Offenbach: Barcarolle from opera "The Tales of Hoffmann" (ca. 3 min)

ドリーブ：バレエ組曲『シルヴィア』(約16分)

Delibes: Ballet suite "Sylvia" (ca. 16 min)

— 休憩 intermission (約15分) —

レスピーギ：交響詩『ローマの祭』(約25分)

Respighi: Symphonic Poem "Roman Festivals" (ca. 25 min)

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業) |

独立行政法人 日本芸術文化振興会

Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra

Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan |

Japan Arts Council



本公演は新宿フィールドミュージアム関連イベントです。

イラスト：ハラダチエ

## プログラム・ノート

解説＝柴田 克彦

## 9.8

## | バッティストーニから感謝の贈り物

今回は「バッティストーニの感謝祭」。「感謝祭」で有名なのは開拓者が初の収穫を神に感謝したことを記念した北米の休日ですが、ここでは東京フィルの首席指揮者バッティストーニの聴衆への感謝、さらには音楽への感謝が込められているといえるでしょう。

プログラムには、トランペットが活躍する華麗で元気の良い曲が並んでいます。「ホフマンの舟歌」以外はファンファーレが登場する明るい音楽。中でもバッティストーニの持ち味全開の『ローマの祭』は、エキサイティングの極みです。そしてもう一つの特徴は、前半のチェコやフランスの曲を含むすべてがマエストロの地元イタリアに関連していること。「剣士の入場」はローマの剣闘士の入場をイメージした曲、「ホフマンの舟歌」の舞台はヴェネツィア、『シルヴィア』はイタリア・ルネサンス期の詩人タッソーの田園劇に基づくバレエです。

では、バッティストーニが情熱的・躍動的に贈る選りすぐりのギフトを満喫しましょう。



今回のテーマは「バッティストーニの感謝祭」。情熱的なマエストロからの「ありがとう」をお楽しみください ©上野隆文

9.8

## ローマの剣闘士の入場シーンをイメージした 賑やかなマーチ



Julius  
Fučík

幕開けは、ユリウス・フチーク(1872-1916)の「剣士の入場」。おなじみのフレーズが出てくる賑やかなマーチです。フチークは、プラハ音楽院でドヴォルザークに師事したチェコの作曲家。軍楽隊の楽長・指揮者を務めながら、マーチを中心に300曲を超える作品を残し、“ボヘミアのスーザ”とも呼ばれています。本作は「フローレンス行進曲」と並ぶ彼の代表曲。1897年に軍楽隊のために作曲されましたが、1910年にカナダの作曲家ローレンドーが「雷鳴と電光」と題して小編成用に編曲し、以来サーカスの定番BGMになりました。

曲は、ローマの剣闘士が競技場に入場する場面をイメージした音楽との由。ファンファーレに続いて、広く知られた陽気なメロディが登場し、トロンボーン等による力強いメロディが続きます。トリオの部分に入ると流麗なメロディが奏され、それが高らかに歌い上げられて結ばれます。



ローマの円形劇場(コロッセオ)内部

9/8

## ヴェネツィアのカンドラのカードを 甘く優美なメロディで



Jacques  
Offenbach

おつぎは、ジャック・オフエンバック(1819-1880)の「ホフマンの舟歌」。ドイツに生まれ、パリで活躍したオフエンバックは、『天国と地獄』など数々のオペレッタで人気を獲得しました。その彼が最晩年に挑んだ唯一のシリアスな歌劇が、有名な「舟歌」を含む『ホフマン物語』。未完に終わりましたが、友人のギローが完成し、1881年に初演されました。内容はドイツの文豪ホフマンの小説から題材を得た物語。オペラは、ホフマンがかつて恋した3人の女性の話(失恋話)を酒場で語る形で進行します。

「舟歌」は、高級娼婦ジュリエッタの幕の冒頭の音楽。ジュリエッタとホフマンの親友ニクラウス（ホフマンを案じる女神ミューズが変身している）が歌うソプラノとメゾ・ソプラノの二重唱です。「美しい夜、おお、恋の夜よ」と恋を夢見る内容が歌われますが、舞台となるヴェネツィアのゴンドラのムードを見事に表した音楽は、様々な形態で演奏されています。密やかな序奏に続いて、波にたゆたうようなリズムが繰り返される中、甘く優美なメロディが奏され、夢見心地へと誘います。

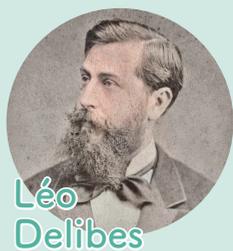


物語の舞台となる水の都ヴェネツィア

## 酒神バッカスを讃える収穫祭を描いた 活気溢れる音楽

前半最後は、**レオ・ドリーブ**（1836-1891）のバレエ組曲『**シルヴィア**』。ドリーブは、フランス・ロマン派の舞台音楽における重要作曲家で、『コッペリア』と並ぶ代表作『シルヴィア』（全3幕）は、1876年に作曲され、同年6月、新装なったパリ・オペラ座の柿落とし公演で初演されました。内容は、狩の女神ディアナのニンフ（妖精）であるシルヴィアと羊飼いの若者アミンタの恋愛話。シルヴィアは悪い狩人オリオンに連れ去られますが、愛の神エロスの助けでめでたくアミンタと結ばれる……といったハッピーエンド物です。

今回は、以下の組曲が演奏されます。



Léo  
Delibes



カラヴァッジョによる酒神バッカス

1. 前奏曲・狩の女神たち：荘厳に開始。やがて角笛が轟き、華やかな音楽が展開されます。
2. 間奏曲と緩やかなワルツ：静かに始まり、慎ましくも優雅なワルツへ。
3. ピッツィカート：軽快で愛らしい舞曲。
4. バッカスの行列：酒神バッカスを讃える、活気に充ちた音楽。

## 絢爛豪華な音楽によって描かれる 古代から現代に至る4つの祭り



Ottorino  
Respighi

後半は、**オットリーノ・レスピーギ**（1879–1936）の交響詩『ローマの祭』。オペラの国イタリアにあって、器楽作品の復興に力を注いだ近代の作曲家レスピーギは、サンタ・チェチーリア音楽院の教授就任後に暮らしたローマからインスピレーションを得て、『ローマの噴水』（1916年）、『ローマの松』（1924年）、『ローマの祭』（1928年）と続く「ローマ三部作」を生み出しました。これらは、ロシアでリムスキー＝コルサコフにも師事したレスピーギの色彩的な書法に印象派のテイストを加えた、精緻かつダイナミックな音楽で、イタリアの管弦楽作品の看板曲となっています。

1928年に書かれた本作は、1929年2月ニューヨークにて、レスピーギの理解者だったトスカニーニの指揮で初演され、大成功を収めました。ここでは、ローマを舞台にした古代から現代に至る祭りが4つ登場し、歴史の流れと祭りにおける人間の様相が描かれます。様々な打楽器やピアノ、オルガンを駆使した音楽は絢爛豪華。なおバンダ（別働隊）として倍音だけで吹く古いトランペット「ブッキーナ」が3本用いられていますが、通常は現代の楽器で演奏されます。



古代ローマ帝国軍が使用したとされる古楽器「ブッキーナ」

以下4曲が切れ目なく続きます（「 」内は作曲者による情景説明）。

**1. チルチェンセス**：古代ローマの円形劇場（コロッセオ）で、暴君と呼ばれた皇帝ネロがキリスト教徒を猛獣と戦わせた残忍なショー。「円形大劇場を威嚇するような空が覆っている。今日は休日『アヴェ・ネローネ（ネロ皇帝万歳）』だ。

鉄の扉が開かれ、聖歌と野獣の叫び声が聞こえる。群衆は激昂し、殉教者たちの歌が高まるが、騒ぎの中に消えていく」。強烈な咆哮とバンダのファンファーレに始まる凄まじい喧騒に、重々しい信仰の動機と教徒たちが歌う聖歌が挟まれ、騒然たる盛り上がりを見せます。

**2. 五十年祭**：50年に一度行われるローマ法王の大赦の祭り。「巡礼者たちが祈りながら、街道に沿ってゆっくりとやってくる。モンテ・マリオの丘の頂上に達すると、永遠の都ローマが現れる。歓喜の讃歌が起こり、教会はそれに応えて鐘を打ち鳴らす」。舞台は中世、巡礼者たちが聖歌を歌い、祈りの音楽が力を増していきます。

**3. 十月祭**：葡萄の収穫を祝う郊外の祭り。「ローマの諸城での十月祭は葡萄で埋まり、狩りの響き、鐘の音、愛の歌に溢れている。やがて夕暮れの中に、ロマンティックなセレナードが聞こえてくる」。舞台はルネサンス時代、角笛風のホルンに導かれて農民たちの騒ぎが始まり、熱狂的に高揚。終盤にマンドリンが登場し、甘いセレナードが流れます。

**4. 主顕祭**：東方の三賢人のキリスト礼拝を記念した祭り。「ナヴォナ広場での主顕祭の前夜。増してくる喧騒の中に、サルタレッコ、手回しオルガン、物売りの叫び声、酔っ払いの声（トロンボーンの独奏）が入り乱れ、活気のある歌が流れる」。陽気な農民舞曲「サルタレッコ」が響く中で上記の場面が続き、狂喜乱舞状態となります。



モンテ・マリオの丘から見えるサン・ピエトロ大聖堂

しばた・かつひこ（音楽ライター）／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」（朝日新書）。